

オリジナルの紙製 VRゴーグルを販売し 顧客の販促をサポート

さまざまなイベント会場でVR映像を 低コストで気軽に楽しんでもらおう

近年、市場が拡大しているVR（バーチャルリアリティ）。印刷業界では映像コンテンツの自社制作は、人件費、機材などコスト増に加え、販路などノウハウがまだまだ少なく、事業として取り組むのは難しい。株式会社ワトムは、ライブやイベントの会場で実際にVRゴーグルを着用して、VRを体験してもらおうとビジネスを開始した。VRを印刷受注にいかにつけ加えるかがポイントとなる。ゴーグルに顧客の要望に応じた印刷を施して販売するVRゴーグルのビジネスについて取材した。

（株）ワトムは、オリジナルの紙製VRゴーグルで手軽にVR映像を見てもらおうとVRゴーグルサービスを始めた。スマートフォンでダウンロードするアプリのVR映像を制作して、VR映像を提供してもらおう企業側には、紙製ゴーグルにPR用の印刷をして、販促物として活用してもらおうサービスを展開して、同社は印刷で収益を得るといふものだ。

「車やオートバイの展示会に出かけた時に高価なゴーグルを着けて車載カメラで撮った映像を観るVRの体験コーナーを見て、VRの時代が到来したと感じました。そこで安価な印刷物とVRを融合できないかと考え、VRのアプリを制作し、厚紙でVRゴーグルを作り販売するビジネスを筑波サーキットに提

案したところ、快く賛同いただきましたので事業化することにしました」と、同社の桜井社長は語る。

（株）ワトムと共同開発した紙製VRゴーグルは、ほぼ厚紙1枚で制作できる設計になっており、利用者が簡単に組み立てられるのが特徴だ。イベント時のノベルティグッズとしても持ち運べる利便性がある。

今年4月に先述の筑波サーキットで開催された「2017全日本ロードレース選手権」のイベントブース内で、来場者にVRゴーグルを着用して実物のレース車両に乗り、筑波サーキットを走行するVR体験サービスを行った。

レース車両に搭載した車載カメラは360

度の方向から撮影できるので、実際のレーサーに近い感覚だ。ブースでは紙製VRゴーグルと組み立て方・取扱説明書、アプリ操作説明書をセットにした「オンボードカメラサーキットVR」を販売した。同時に行ったアンケートでは、参加者186名のほとんどがVR初体験だったこともあり、大多数が「とても楽しかった」「今後も体験したい」という回答に将来性を感じている。

紙製VRゴーグルは、厚紙の表面に印刷をして、顧客の販促に結び付けていくことが目的だ。VR映像は協力会社が撮影し制作するので、同社は印刷で収益を上げる。デザインは顧客からの支給とデザインから印刷まで受注するケースなど、柔軟に対応していく。

当面は全国のサーキット会場で、このサービスを展開していく予定だ。利用者は無料のVRアプリをダウンロード（iPhoneはApp Storeより、AndroidはGoogle playより）し、組み立てたゴーグルにスマホを装着し映像を見ることができる。

また、この紙製VRゴーグルとスマートフォンがあれば、前記で紹介したアプリ以外でも各ストアから好きなVRアプリをダウン

ロードして楽しむことができる。利用者には安価でVRを体験してもらい、顧客にはノベルティグッズとして販売促進と併せて、VRを広めていく効果が期待できるわけである。同社としては、営業面では付き合いの無かったメーカーとの接点を持つことができ、宣伝、印刷媒体の受注にも繋げることができて、新規開拓が期待できるメリットがある。

「今後は、さまざまなライブ・イベント会場で、特典ライブ映像のVR体験をしてみたい、VRゴーグルを販売する構想もあります。そのため紙製ゴーグルのデザインも、より見やすく装着しやすいものにした」とデザイナーの加久保氏は語る。

「印刷された紙製ゴーグルを売るためには、クオリティの高い動画コンテンツが重要になります。当社はARアプリ開発や映像制作も行っていますが、本業の印刷需要拡大に繋がるようにオリジナル紙VRゴーグルを制作し販売に注力していきます」と、桜井社長は紙製VRゴーグルの販売に意欲を燃やしている。

なお、同社は7月5日（水）から7日（金）まで東京ビッグサイトで開催される「第9回販促EXPO」に、同VRゴーグルを出展する。

販売数が増えるVR映像の制作と 印刷による販促展開で顧客を支援する



デザイナー
加久保 学



オリジナル印刷可能なVRゴーグル（左）
筑波サーキットに出展し販売しているVRゴーグル式（右）



オリジナル紙製ゴーグルを紹介したWebサイト
http://www.watom.jp/vr_goggles/